

元興寺智光伝について

滝 安 雄

先ず日本浄土教思想發展史の上において、何人も問題として注目すべきは、南都に於てその代表的存在として、智光が見出されている。そして智光のその教学的地位、およびその浄土教思想を解明する過程において、未だ幾多の問題点が存すると考えられるが、本稿においては、智光の伝歴とその教学的地位のみに焦点を絞つて、彼の思想究明への第一の手がかりとしたのが目的である。又教學思想の問題については、他日にゆずることとし、今は課題に中心点を置きたいと思う。

さて吾が国に仏教伝来以来、特に浄土教関係經論疏の伝来は、すでに神龜四年（A D 七二七）「阿彌陀經」の書写を始め、天平年間に伝来書写されている事は、正倉院文書の書写関係文書によつて知る事が出来るのである。しかしこれ等はすべて学問的關心のみによつて導かれたものでなく、書写、誦誦等の功德等の種々の条件を考慮に入れて考えねばならないが、この經論疏の伝来の実際と研究のズレについては問題があるとして、ともかく学問的關心の方向の一端を推察する事が出来ようか。

しかして奈良仏教は主として、大陸仏教の祖述を本旨としたから、經論疏伝来等の環境上の諸条件は当時の学問的傾向を起すには極めて重要なことである。さて仏教史で一般に論述されている如く、南都六宗の中で、その中心となるのは、三論・法相・華嚴の三宗であり、この中、特に浄土教思想史上、最も注目すべきは、三論宗である。この三論宗と浄土教との関係につい

ては、既に宮中において、「無量寿経」を講じた僧惠隠についてみる事が出来よう。しかして、これより時代を降ること、二世代を経て、元興寺智光が出ている。ここで課題として、智光伝歴について考察したいと思う。

智光伝歴考察の上において、先ず問題となるのは、その史料の困難とその史料の価値である。彼の生国・生年年時、俗姓・所住の寺・著作年時・寂年等を記したものが甚だ僅少であるが、その根本史料としては、「日本国現報善惡靈異記三卷」（奈良薬師寺景戒撰、弘仁年間（A D 八一〇）八二四）に成立したとされているが、これについても史料の問題を尙考察すべきである）があり、又彼の著「般若心経述義」が挙げられよう。

先ず靈異記巻中にある、「智者、變化の聖人を誹り妬みて、現に閻羅の鬪に至り、地獄の苦を受けし縁第七」の条に

「釈の智光は河内の国の人、その安宿郡鋤田寺の沙門なり、俗姓は鋤田の連、後に姓を上の子主と改む。母の氏は飛鳥部の造なり。天年聡明、智慧第一なり。子蘭盆・大般若・心般若等の経疏を造り、もろもろの学生のために仏教を読み伝ふ云々」（高瀬承厳 校註和訳本四〇頁以下）

とあり、彼の伝歴を一部ながら伝えたものとして最も古いようである。又彼の伝歴については更に「日本往生極楽記」（続浄全六・七頁以下）、「元亨釈書」（日仏全一〇一・一六〇頁以下）、「私聚百因縁集第七」（日仏全一四八・一二四頁以下）、「本朝高僧伝巻四」（日仏全一〇二・九〇頁以下）等にも略伝を記述しながら、確かな年時を知る事が出来ないものであるが、智光の著である「般若心経述義」の序文によると、生誕並びに出家の年を知るのにはその根本史料と

云うべきで、以下これ等によつて論を進めたい。

「般若心経述義」序文によると

「從生九歳、避憤肉処、遊止伽藍。然自志学、至天平勝宝四年、合三十箇年中、專憩松林、練身、研神、隨堪礼説周覽聖教云々」(日大藏(三五)般若部章疏三・五八頁以下)

と述べている所より彼の出生年時・出家年時を知る重要な一つの手がかりとなると思うのである。ここで文中にある「志学」とある語に注目し、今「志学」を彼の十五才とする事を許されるならば、十五才より天平勝宝四年(A D七五二)迄三十箇年とあるから、逆算すると、元正天皇養老六年(A D七二二)が智光の十五才となる事が分り、従つて出生年時は元明天皇和銅元年(A D七〇八)となる。これよりして、出家年時は序文によつて、一応九才とすると、即ち靈龜二年(A D七一六)になる。而して彼の出家入寺した寺については、勿論確實な事が判明しないが、彼の伝歴における生国俗姓等について述べている「靈異記」の記事から推察するとき、鋤田寺とするのが妥当であると思う。而して出家入寺より元興寺に住し彼の活躍した事についてもその年代的に考証する事も重要な事であるが、それを具体的に示す史料がないために確實にはこれを知る事が出来ないが、先ず、彼の寂年年時を述べた後に少しくその教学上の問題のとき、その一端を触れてみたいと思う。

寂年年時については、「靈異記」巻中に

「……上略……智光大徳は法を弘めて教を伝へ、迷を化して正に趣かしめ、白壁天皇の世を以て、智囊、日本の地を蛻し、奇神、不知の堺に遷れり」(高瀬承敏 校註和訳本四二頁)とあり、即ち白壁天皇は光仁天皇であつて、その世と云つてゐる。而して、今、年表をみる

に、光仁天皇の即位は、宝龜元年（AD七七〇十月一日改元）であつて、その存位は、宝龜十一年（AD七八〇）で最終である。依つて、智光の寂年年時は、出生年時を和銅元年（AD七〇八）とすると、七十才前後即ち、宝龜年間（AD七七〇〜七八〇）に寂しその生涯は奈良時代全般にわたつていたと考える事が出来よう。

ここで前にも一言したが智光が出家以前、鋤田寺に住処していた事も推察出来るが、彼が何才のとき元興寺に入寺したかについては、これを明らかにする史料は見当らず、彼の教学の大成および活躍の中心は、元興寺であつたであろう。それを示すものとして「元亨釈書卷第二」に、

「釈智光。内州人。共礼光止元興寺、得智藏三論之深旨、云々」（日仏全一〇一・一六〇頁以下）

とあり、「私聚百因縁集卷第七」によると

「抑々本朝聖武天皇御時大和国奈良葉里元興寺一室修学同心求菩提有沙門。即号云智光頼光、共学送年云々」（日仏全一四八・一二四頁）と、又

「諸寺縁起集」所収の「元興寺縁起」に

「極楽房智光頼光之旧居也云々」（日仏全一一八・一一頁）とあつて、元興寺極楽房に住処していた事が分るのでありその他「東国高僧伝」卷第二（日仏全一〇四・一三頁以下）にも、いずれも同門の礼光と共に元興寺に住処していた事が知られるのであるが、彼の著である「般若心経述義」の著作年時は、天平勝宝四年（AD七五二）であつて、「南都元興寺住釈、智光撰」（日大蔵（三五）三五八頁以下）とあるから明らかに天平勝宝四年頃まで元興寺に居つた

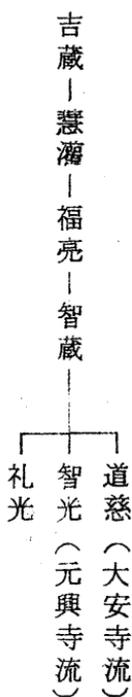
が、三年後に元興寺を離れている事があり、それを示すものとして、正倉院文書写経文書に「奉請陀羅羅尼集十二卷

如意輪陀羅尼經一卷

右、奉請八田智光師如件

天平勝宝七歳八月廿一日云々」(大日本古文書十三・一五四頁)とあり、天平勝宝七年(A D七五五)には元興寺に住処して居らないが、その後、再び元興寺に帰り寂年迄住処して来たであろう。

而して智光は三論の学匠であつた事は三論宗系譜・諸伝に見えているから、ここではその詳細については論ずる事をさしひかえるが、図示すると



となり、智光の師を智蔵となつてゐるがこれに就ても尙問題があるが、ともかく三論宗の系統であつて、嘉祥大師吉蔵系である事は、慧灌、福亮共に吉蔵より三論の深旨を受ける事が明らかである。(慧灌伝「元亨釈書」日仏全一〇一・三二二頁以下等)又、智光の吉蔵系正統を示すものとしては、現存の「浄名玄論略述」は五巻からなつてゐるといわれるが、その内巻第一本末、巻第二本末、巻第三本末、巻第五本等は現存してゐる。而して本書はかの嘉祥の「浄名玄論」を略述させるものである事、および今は現存してゐない「法華玄論略述」に就ては、聖岡の「伝通記採鈔」巻一に

「智光者南都元興寺人造淨土論疏五卷、此人受嘉祥法華玄作略述釈彼玄論」(淨全三・六三頁)

とあるをみても、嘉祥大師吉蔵の正統を伝えた三論宗の学匠であつた事は明らかになつたのである。

さて、智光の著である論疏を挙げると次のようになる。

- 一、「大般若疏」二十卷
- 二、「法華玄論略述」五卷
- 三、「淨名玄論略述」五卷(現存)
- 四、「無量寿經論釈」五卷
- 五、「正觀論」一卷
- 六、「孟蘭盆經疏」一卷
- 七、「般若心經述義」一卷(現存)
- 八、「中論疏記」六卷
- 九、「初学三論標宗義」一卷

以上 東域伝燈目錄に出ず。(日仏全一・仏教書籍目錄第一)

以上 諸宗章疏錄に出ず。

- 十、「四十八願釈」一卷
- 十一、「觀無量寿經疏」

以上 仏典疏錢目錄に出ず。

十二、「安養賦」一卷 浄土依憑經論章疏目錄に出ず。

以上、著作の内「般若心經述義」は現存する唯一のもので、その著作年時については本書序文に天平勝宝四年とあることからはつきりしているが他の著作の中「浄名玄論略述」は一部分のみ現存し、他は、如何んながら現存していない故、その著作年時は不明である。

以上概略ながら智光の伝歴と教学的地位、著作について述べたが、未だ今後に残された問題もあり、又智光の浄土教思想を説明すべき、「無量壽經論釈」五卷は部分的に、智光以後の諸師に引文され、散逸しているものを、高西賢正氏「智光の浄土論疏に就て」(仏教研究七卷一二合併号)戸松憲千代氏の「智光の浄土教思想に就て」(大谷学報十八卷一・四号、十九卷一号)等によつて、復元を試みられており、最近本学の恵谷教授が坂木西教寺蔵「安養集」より復元を更に、徹底されているから、これを資料として彼の浄土教思想を知る唯一のものであるが、この研究については今後に課せられた問題として、他日にゆずり本課題としての稿を置きたい。